

平成二十一年度

高山市近代文学館調査・研究報告書

平成二十二年三月

社団法人 高山市文化協会

序

平成二十一年度、高山市から委託を受けた「高山市近代文学館調査・研究」については、故中舎高郎氏の著書「飛驒の文学碑遍歴」に著されている俳句・短歌・詩・記述等々の文学碑を、より多くの市民の皆様にご理解いただくことを念頭に、碑文の作者はもとより、碑に刻まれた文学者・国学者・碑を製作した石工等、文学碑の背景に現れる人物・組織についても調査しました。調査の結果は不十分ではありますが、これから引き続き調査と研究を行い、郷土の文学の振興に尽くしてまいります。

今年度実施しました成果を、ここに報告書としてまとめました。

社団法人 高山市文化協会

会長 小鳥 幸 男

次

(一)郷土の文学碑展	城山編	
平成二十一年十月三十一日～十一月一日.....1		
(ア)城山文学碑位置図		1
(イ)永瀬彰翁碑	ながせあきら ゆうさく	2
(ウ)夕咲碑	まつだつねのり	4
(エ)松田常憲碑	やまだしゅうらい	6
(オ)山田秋籟碑	しょうむ	8
(カ)小夢碑	.	1
(キ)こだいじん歌碑		3
(ク)白雲山桜花碑	はくうんざんおうか	4
(ケ)岡田禾木碑	おかだかぼく	6
(コ)ライオンズクラブ記念句碑		7
(サ)垣内松三碑		9
(シ)飛驒山娘詩碑		1
(ス)芭蕉古池碑	ばしょうふるいけ きくたじょうし	3
(セ)菊田丈子碑	さんせい	5
(ソ)三声塚	ひらた	6
(タ)平田長等句碑	かいんかい	8
(チ)花蔭会句碑	こもつか	9
(ツ)薦塚	.	1
(テ)館柳湾詩碑	たちりゅうわん	3

二、郷土の文学碑展　　～飛騨國分寺編～　　……………

平成二十二年二月二十日～二十一日……………　　34

(ア) 飛騨國分寺境内 句碑・歌碑配罩……………　　34

(イ) 瀧井孝作 句碑……………　　35

(ウ) 茶流 句碑……………　　37

(エ) 水音社 句碑……………　　38

(オ) 森江鷗 句碑……………　　40

(カ) 北川可慎 碑……………　　44

(キ) 短冊塚……………　　50

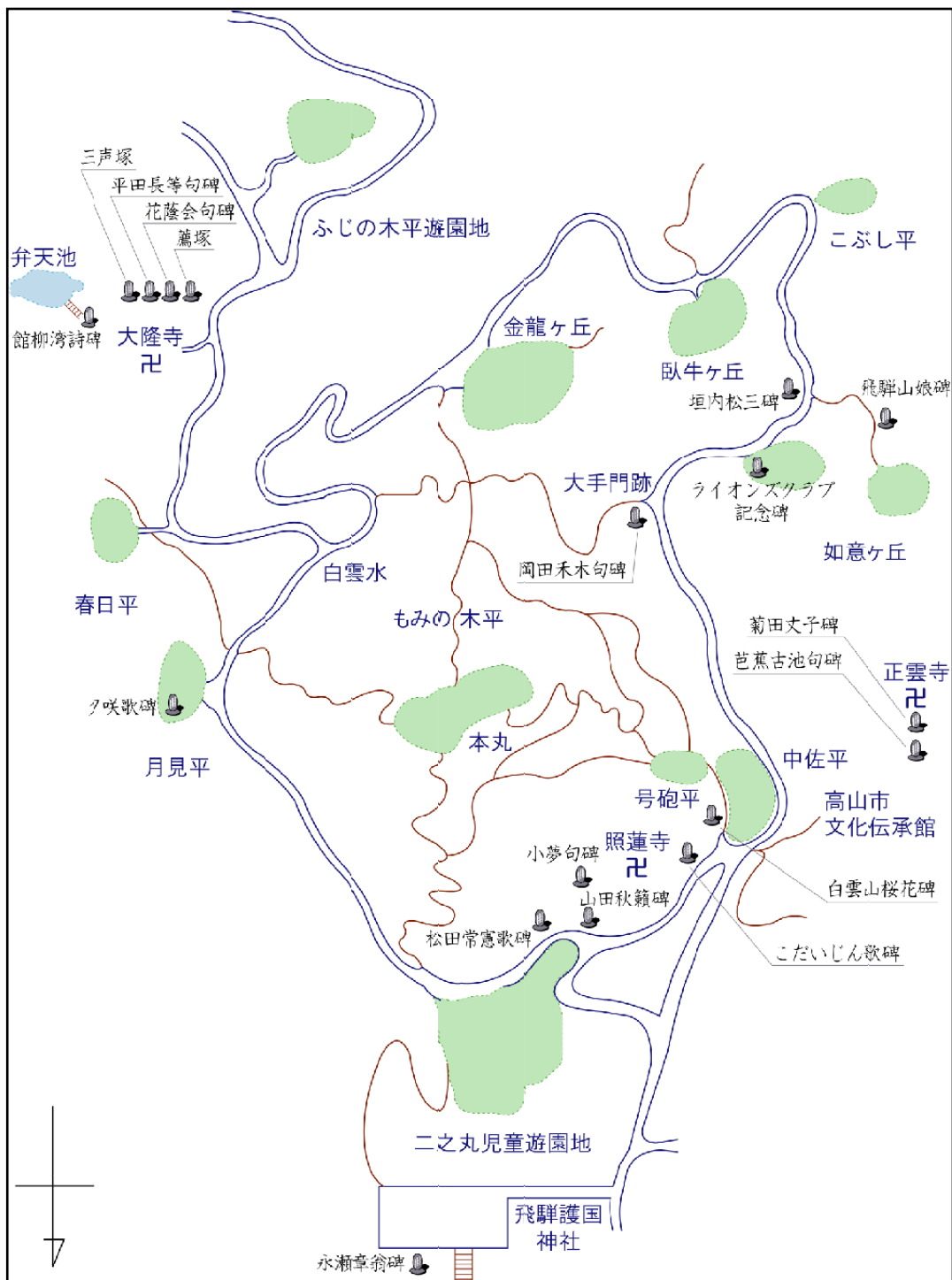
(ク) 田島春園 歌碑……………　　53

三、参考文献……………　　57

一、郷土の文学碑展 く城山編く

平成二十一年十月三十一日く十一月一日

(ア) 城山 文学碑位置図



(イ)

永瀬彰翁碑
ながせあきら



明治三十七年(一九〇四)十月十五日 門弟が建立 護国神社境内

ながせあきら

【永瀬彰】

生年不詳、明治二十二年（一八八八）四月六日

書家。幼名を熊太郎。静岡、由郎と称する。岩佐一亭に入木道を学ぶ。寺子屋を開いて多くの門弟を指導した。

たつたまんねん

【立田万年】

明治二年（一八六八）十二月十八日、昭和十五年（一九四〇）五月十二日

石工の名人・神職。河合村（飛騨市）角川生れ。旧姓は湯畑。号は湯万年。初名を梅之助。重義とも名乗る。坂上村の立田家を継ぐ。一二歳で上京して彫刻師の岡田広次に入門し、石材彫刻の皆伝を受け帰郷。養老公園碑、七卿西竄記念碑、和宮和歌碑は三大傑作とされる。手掛けたものは八十を超え、飛騨においては皇威輝八鉞岩碑、田島春園歌碑など六十に近い。

【飛騨人物事典】

(ウ)

ゆうさく
夕咲 碑

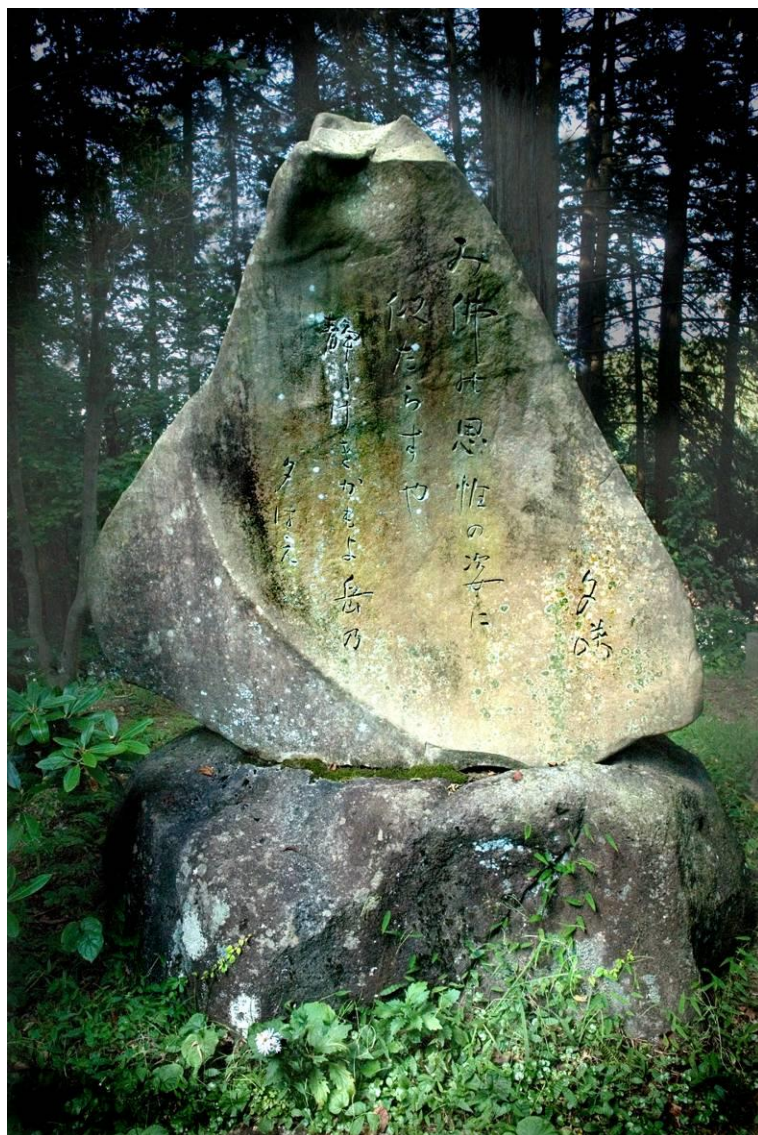
夕咲

み佛の思惟の姿に

似たらすや

静けきかもよ岳の

夕はえ



昭和二十三年（一九四八）四月六十三歳で没すると、

飛騨短歌会は建碑にとりかかり、十一月には完成した

城山月見平

ふくだゆうさく

【福田夕咲】

明治十九年（一八八六）三月十二日、昭和二十三年（一九四八）四月二十六日

俳人。本名有作。斐太中学、早稲田大学文学部卒。学生時代に野口雨情、相馬御風らと「自由詩社」を創設。明治四十二年（一九〇九）読売新聞社に入社し北原白秋、若山牧水らと詩壇の新運動に参加。

家業を継ぐため大正三年（一九一四）帰郷、瀧井孝作らと「ツチグモ」の創刊（大正三）。「飛騨新聞」の創刊（昭和二十二（一九四七））を始め山百合詩社、飛騨山刀俱樂部、飛騨短歌会などを育てた。詩集「春の夢」、歌集「山花一束」、「山ずと」など。飛騨の文化の発展に大きな功績を残した。

(エ)

まつだつねのり
松田常憲 碑

うつしうえし 庭の
あららぎは 枝たれて
ひともとすがし
月のあかりに 常憲



昭和三十五年(一九六〇)夏 同窓同志が追善のため建立

城山二の丸公園

まっただつねのり

【松田常憲】

明治三十八年（一八九五）十二月一日、昭和三十三年（一九五八）三月十三日

歌人。福岡県甘木市出身。國學院大學師範部国語漢文科卒。中学生のころから歌を好み、大正六年（一九一七）尾上柴舟に師事。尾上の後を継いで歌誌「水甕」を主宰。大正七（一九一八）十年（一九二二）斐太中学で教諭を務めた。歌集「ひこばえ」「好日」「三経集」ほか。

(才)

やまだしゅうらい
山田秋籟碑



明治二十九年（一八九六）五月建立

城山稻荷参道

秋籟山田翁碑 皇太后宮亮正三位勲四等子爵高辻修長篆額

翁諱葆光字敏氏初慙蠖齋後秋籟山田氏飛驒高山人父稱奉安母山田氏翁幼敏警有神童稱天保中遊京師從學梁川星巖出入在門凡十年既歸集楮・句讀仄箕書書・其所長頗獲晉唐矩矱・攻六書每夜熟誦康熙字典譜一字輒書之零帙以吞日欲永置胸中而不遺也又好老莊暇則玩讀翁狀貌清癯資性・潔沈毅・言咲然接人溫和教子弟尤諄一曾無倦色是以一鄉學字者莫不入其門出四方成名者尤多翁雖出梁門未嘗作詩然非深獲溫柔敦厚之・教養得宜安・至此・翁生文政五年正月廿五日歿明治三年十月八日春秋四十有九塋先兆之次・松島氏無子妾・男女各二項門人持狀來乞余銘乃係銘曰

發蒙養正 群英如林 誰護翁德 山高水深

明治二十八年十月 五位三島毅撰文

正四位勲三等巖谷修書

石工 砂原源吉・

やまだしゅうらい

【山田秋籟】

文政五年（一八二三）一月五日、明治三年（一八七〇）十月八日

私塾教師。本姓は船津町の広田で、高山の医師・山田泰安の養子。名は葆光。字は敏民。号は蟻齋。京都で梁川星巖に学ぶ。高山で塾を開いて句読書算を指導。「康熙字典」をすべて記憶したといわれる。

(カ)

小夢^{しょうむ}
碑

小夢
手を拍てば
池に
声あり
寒の月



昭和三十三年（一九五八）建立

城山稻荷参道

にしもとしょうむ

【西本小夢】

慶応三年（二八六七）十月二十六日、昭和四年（一九二九）二月二十四日

医師・俳人。古川生れ。本姓は熊崎で高山二之町の西本治郎兵衛の養子。名は達郎。号は雲心庵小夢。金沢甲種医学校卒。明治二十六年（二八九三）頃高山で開業。雲橋社十一世で花蔭会の宗匠。句集「みちの落葉」ほか。

(キ) こだいじん 歌碑

きりよがよいとて

けんたいぶりおきやれ

深山奥山そのおく山の

岩に咲いたる千重のつゝじ

なんぼきりよよく咲いたとしても

人が手をさゝにや

その身そのままで果てる



昭和三十六年（一九六二）建立 庄川会創立三十周年記念碑 城山照蓮寺境内

庄川村、白川村で古くから伝わる民謡の歌詞。今は「古大尽」と書くが、「子大事」が正しいという説もある。発祥は長享・延徳年間（一四八七～一四九二）ころ。

(ク)

はくうんざんおうか
白雲山桜花碑

今はむかし、貝塚翁の此国につかへまつられけるとき、此処
の人々とはかりて、この尾のうへに手つからも、人しても、櫻
木のおほく植ゑられけるか、いまもいとめでたくさかえたりけ
るか翁みやびたる志をつきてこたひまたさらにあまたの苗う
ゑそへそのかみくちすさまれくる翁の句を石にゑりつけてのこ
してとてかくはものしつ

植てなほ 花に命の をしきかな 素牛



天保三年(一八三二) 貝塚素牛追悼のため

第十九代郡代大井帯刀永昌とその元締菊田秋宜等が建立

城山中佐平手前

かいづかそぎゅう ぶんじうえもん

【貝塚素牛（文次右衛門）】

生年不詳、文化七年（二八一〇）八月二十九日

俳人・飛騨郡代の元締手代。名は典寛。号は素牛。文化十一年（二八一四）に郡代の田口五郎左衛門に従って着任。高山城址（城山）が荒廃しているのを嘆き、有志と桜を植え観花場を開く。後の郡代・大井永昌が貝塚の句碑を白雲山（城山）に建設する。

(ケ)

おかだかぼく
岡田禾木
碑

立つ冬を

残る木葉の

さゝやけり

禾木



昭和三十三年（一九五八）晩春建立 城山遊歩道通称大手門手前

おかだかぼく

【岡田禾木】

明治五年（一八七二）～昭和二十年（一九四五）五月十日

俳人・荒物商。通称は肥吉。号を富士屋。花蔭会に属し後に茶仏庵とともに山栴会を興す。
句集「燕子花」など。

(コ) ライオンズクラブ 記念句碑

花の山
花の
ところに
人住みて
千歩



昭和四十三年（一九六八）

高山ライオンズクラブ国際認証十周年 明治百年記念建立

城山遊歩道通称大手門先

【蘭亭千歩（加藤專一）】
らんていせんぽ かとうせんいち

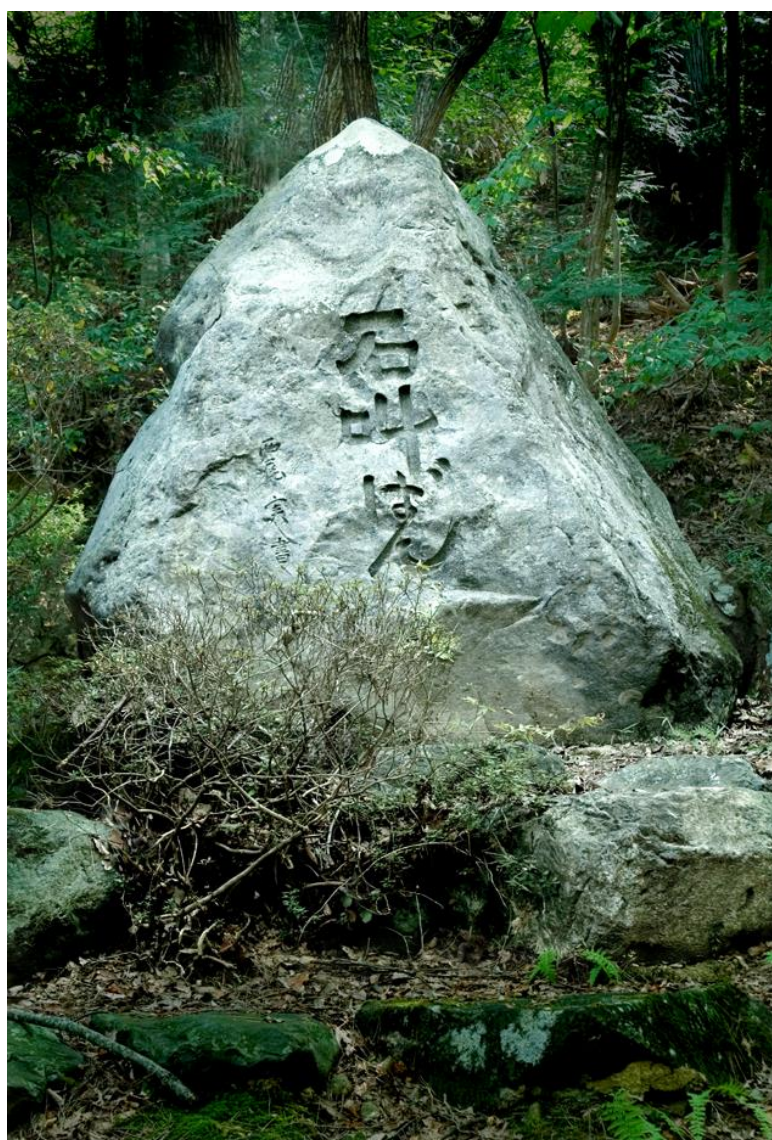
明治三十七年（一八九四）三月十三日、昭和五十六年（一九八一）七月二十六日

医師・俳人・高山市名誉市民。幼時に叔父、加藤規矩男の養子となる。通称は加藤專一。雲橋社十五世で、昭和十五年（一九四〇）に加藤家の祖である歩簫の資料を「蘭亭遺稿」として発刊。二十二年（一九四七）の飛騨俳句会結成に尽力した。著書「纏の韻」、遺句集「枯尾花」など。

(サ)

垣内松三碑

石叫ばん



全国の子弟による追悼記念
城山遊歩道通称大手門先

かいとうまつぞう

【垣内松三】

明治十一年（一八七八）一月十一日、昭和二十七年（一九五二）八月二十五日

国語学者・国語教育学者。号は松実。大正八年（一九一九）から文部省の嘱託としてドイツ、フランス、イギリスに留学し女子職業教育、教科書調査などを行なう。大正十一年（一九二二）に著した「国語の力」は名著とされ、国語教育界に大きな反響を呼んだ。文学史、国文学概論、文学研究法を講じ多くの後進を養成した。雑誌「読方と綴方」、「国文教育」、「コトバ」などを創刊。著書「国語の力」「形象論序説」「国語教育科学概説」「国文学体系」など。論文多数。

(シ)
飛驒山娘 詩碑

作曲 山下笛朗

作詞 吉村比呂詩

わたしやおく飛驒
山娘
都はなれた
山里の
深い谷間に
咲いた花
人に知られぬ
山つつじ



昭和四十三年（一九六八）五月高山市民合唱団が建立

如意ヶ丘

よしむらひろし

【吉村比呂詩】

明治四十一年（一九〇八）八月一日、昭和四十二年（一九六七）一月十日

詩人。本名は広吉。昭和二年（一九二七）教員として勤務の傍ら、詩作に専念。NHKからラジオ歌謡児童向け連続放送劇が放送され、その中の「山のしずかな水音」は全国ヒットとなり、詩壇の地位を確立した。全国各地の校歌を残した。昭和二十二年（一九四七）創刊の「飛驒新聞」の編集発起人となる。詩集「白い人形」「雪線に描く」など。

やましたてきろう

【山下笛朗】

明治三十六年（一九〇三）九月二十三日、昭和四十八年（一九七三）八月一日

高等学校音楽教師、高山市文化協会会長。本名は佐助。幼名を尚次。昭和六年（一九三一）から各高等学校で音楽教師を務めた。「斐中行進曲」「飛驒山娘」ほか多数作曲。高山音楽連盟会長・高山演劇集団会長等を歴任。道ずれ吟社と劇団路踏志座の結成に尽力。音楽にとどまらず飛驒の文化活動の中心的存在。「福田夕咲全集」を発刊。

(ス)

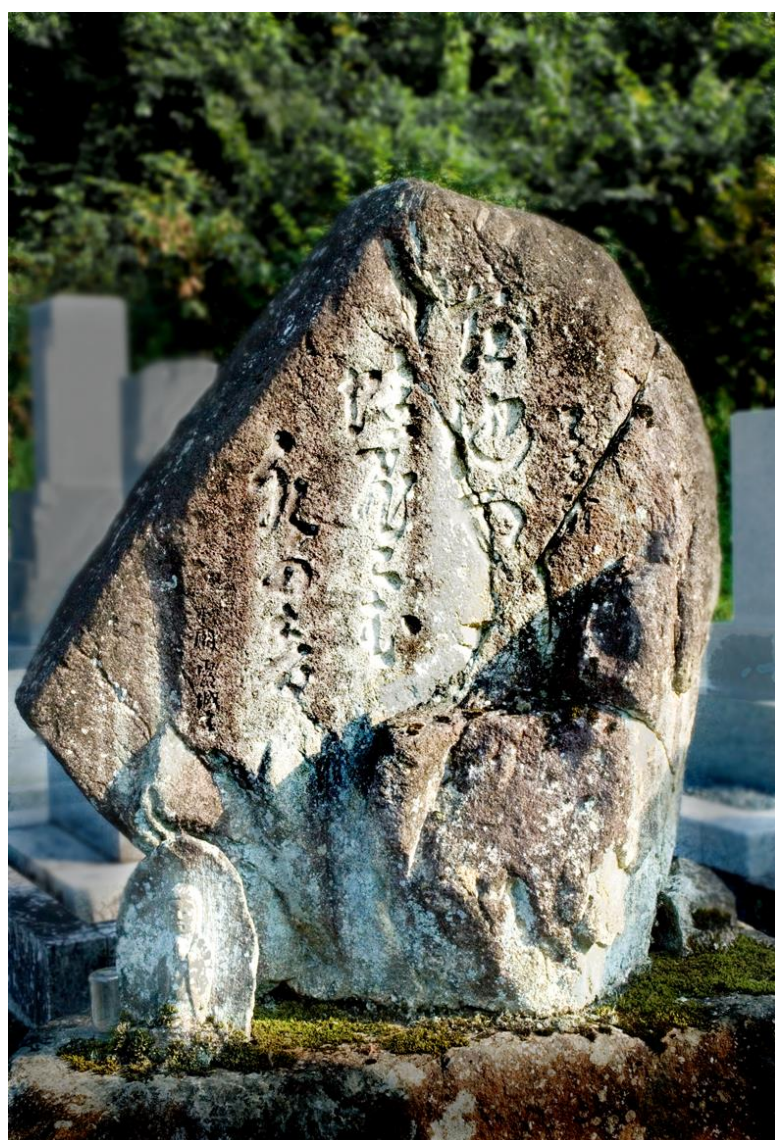
芭蕉古池碑
ばしやうふるいけ

古池や

蛙飛こむ

水の音

本廟露城書



大正四年（一九一五） 五松庵社中、花蔭会月次二百回記念に建立

神明町正雲寺墓地

【無名庵（本廟）露城】
むみょうあん ほんびょう るじょう

昭和三年（一九二八）五月八日没

俳人。姫路の人。本名は瀬川正夫。号は俳禅窟。芭蕉翁は滋賀県大津の義仲寺にある庵「無名庵」を好み、芭蕉の死後その亡骸は木曾義仲の墓の隣に葬られている。露城は明治四十年（一九〇七）四月に無名庵十五世を継ぎ、正風会を創設して芭蕉の顕彰につとめた。

(七)

きくたじょうし
菊田丈子 碑

菊田丈子は熱田神宮の神官菊田太夫の二女にして實名はきん
安政五年五月十日生る幼にして失明し専ら箏曲を小松檢校に
學ふ明治三十年八月永田もと子の幹旋に依り高山三之町に來り
寓し箏曲指南を為すや來り學ぶ者多く高山地方に於ける斯藝の
宗匠たり大正十一年六月十二日病歿す六十五なりき

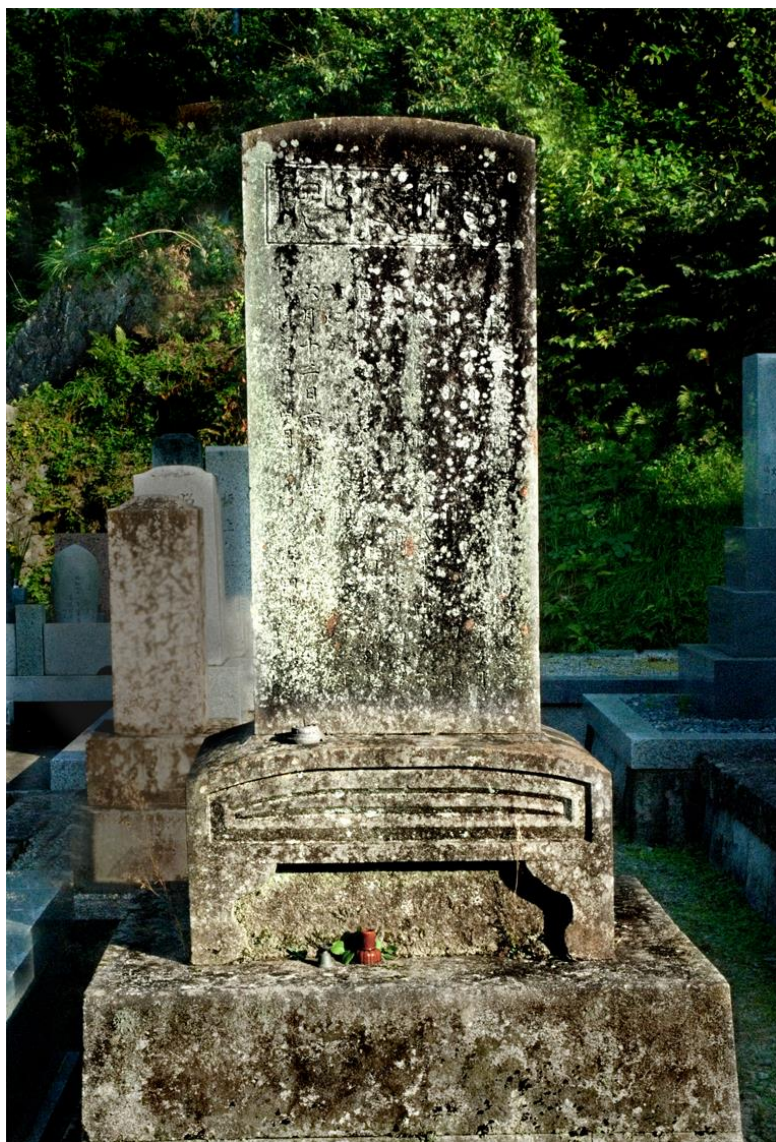
富田 豊彦書

きくたじょう
【菊田丈】

生年不詳、大正十一年（一九二二）六月

琴の師匠。熱田神宮の菊田黒太夫の娘。永田とも子の幹旋で高山三之町にて箏曲を指導。
飛騨地方の地唄、三曲を復興する。

昭和四年（一九二九）五月建立 神明町正雲寺墓地



(ソ) さんせい
三声塚

兔来

萍のおし出す月や郭公

涅槃会や

午有

山のわらひもきのふまで

ひるの月や

たよる物にも

石の階

弄花



文政三年（一八二〇）初秋建立 大隆寺墓地

のぐちこゆう

【野口午有】

生年不祥、寛延四年（一七五二）二月二十二日

俳人・御役所御出入医師。富山の人。補透主人・養安と称す。高山で開業。江戸から高山に移住していた俳人の井田至芳と親交深く「雲橋庵」四世宗匠を継ぐ。句集「美津氣之記（みづげしき）」を編集。

のぐちとらい

【野口兔来】

享保八年（一七三三）、寛政四年（一七九二）十二月二十四日

俳人・御役所御出入医師。午有の長男。初名は元安。通名を養安。号は片月窓・月窓・枇杷亭。医術と俳諧を父に学ぶ。宝暦三年（一七五三）父午有の編んだ井田至芳序、兔来跋「美津氣之記」を上梓。

のぐちろうか

【野口弄花】

宝暦九年（一七五九）、文政十一年（一八二八）五月十六日

俳人・御役所御出入医師。古川町の人。本姓は渡辺、野口元安の養子。名は玄珪。字は土錫。号は蕪城・論安。養安と称す。

「雲橋社」六世宗匠を継ぐ。

(夕)

ひらた
平田長等 句碑

さけ瓶のなきも

あわれや涅槃像

長等



加藤白翁（歩簫）が愛弟子のために建立 大隆寺墓地

ひらた
【平田長等】

生年不詳、文化元年（一八〇四）三月八日

俳人。名は友直。字を子温、今日庵。通名忠次郎。俳道の造詣深く佳吟多い。「雲橋社」元勲。

(千)

花蔭会かいんかい
句碑



花蔭会 月次句会百五十回記念に建立 大隆寺墓地

陽炎の	ちからに動く	厳かな	翹翁
入梅晴れに	もう違ひなし	不二の山	掃月
明星や	花の中ゆく	法螺の音	可中
不如帰	なくやはなしの	跡戻り	夕景
寝もやらで	覗いてはみつ	雨の月	雨台
春風や	都大路の	裾模様	不及
御降の	賜ものならむ	松の艶	旭州
むつくりと	牛起き上る	霞かな	其声
闌な	春を離れて	不二の山	壺仙
世の中の	賑しうなる	桜かな	桃雨
酔醒の	水呼ぶ頃や	蜀魂	桂雪

海からも	春を運ぶや	桜鯛	淇澳
網代守	子は川竹に	育ちけり	翠雨
唐崎に	雨きく夜や	鮒鱈	東州
更待や	椽の手燭も	出した俣	竹友
塔の影	曳く小山田の	鳴子かな	畦堇
春浅き	山に来てなく	男鹿かな	抱月
赤々と	夕月の残る	熟柿哉	花汀
灯消す	風にも香あり	花の宿	倒扇
屏風岩	滴る水や	紅葉散る	麦花
篝消えて	木戸に人なし	夏の月	松月
暖や	松風光る	並木原	悟究
朝寒や	棹さすひとの	頬冠	又水

【花蔭会】
かいんかい

明治二十二年（一八八九）前越旭州の提唱で創立。宗匠は永田吉右衛門五松庵不及。

(ツ)

こもつか
薦塚

薦を着て

誰人います

花の春

芭蕉



加藤步簫の長男蘭亭李充が、雲橋社中と図って天保十三年（一八四二）に建立

大隆寺墓地

らんでいりじゅう

【蘭亭李充】

安永七年（二七七八）十二月二日、嘉永二年（一八四九）四月二十五日

俳人。雲橋社七世。歩簫の長男。幼名は太次郎。通称を正次郎・小三郎。名は清雄。号を蘭亭（戎）・柏翁。書道、国学、雅楽を好む。

うんきようしゃ

【雲橋社】

加藤歩簫は幼より学を好み、六歳より父の塾にて学を修め長じて、五升庵蝶夢の門に俳諧を、伴蒿蹊の門に国学及び文章を学んだ。明和八年（二七七二）鷗社を創立して俳諧及国学研究をなし、安永元年（二七七二）父隠居後は私塾を継承した。有名なる田中大秀・赤田臥牛の如きも、幼時薫陶を受けた。同二年（二七七三）鷗社を拡充して雲橋社を創立し、宗匠に推されて、其大一世に居り文芸による人格の浄化と家学の基本たる敬神尊皇の大義を鼓吹した。同四年（二七七五）雲橋社文庫を開設して衆庶の閲覧を計った。

【高山市史】

(テ)

たちりゅうわん
館柳湾 詩碑

来尋上方寺寂 古城陰山眺
万松時僧帰一径深浄香薫
夜殿寒磬轍秋林頼覚迷う途
遠合龍燈照客心 館機題



文化元年（一八〇四）暮春に赤田臥牛識 明治二十四年（一八九二）建立 大隆寺境内

たちりゅうわん
【館柳湾】

宝曆十二年（一七六二）三月十一日、弘化二年（一八四四）四月十三日

漢詩人。越後の人。通称は雄次郎。号は石香斎。字を枢卿。寛政十二年（一八〇〇）四月に飛騨郡代・小出大助の元締として着任。赤田臥牛らと交わる。著書「林園月令」など。

二、 郷土の文学碑展 〈飛騨国分寺編〉

平成二十二年二月二十日～二十一日

(ア) 飛騨国分寺境内 句碑・歌碑配置



(イ) 瀧井孝作 句碑

大銀杏

鳥のこもりね

若菜哉

孝作



平成十一年十一月、医王山國分寺では、大銀杏保護用玉垣の完成を祝い、落慶法要が営まれた。記念に大銀杏と深い関わりのある、瀧井孝作のこの句を選び句碑を建立した。

たさい こうさく

【瀧井孝作】

明治三七年（一八九四）四月四日～昭和五九年（一九八四）十二月二十一日

小説家・文化功勞者。高山市空町（現大門町）生れで東京都八王子市に居住。号は折柴。河東碧梧桐に師事し俳句の道に入った。大正八年（一九一九）時事新報記者になり、このころから芥川龍之介、志賀直哉らの知遇を得て文筆活動が旺盛となり『飛騨高山』などの短篇小説や隨筆を次々に発表。昭和二年（一九二七）代表作『無限抱擁』発表。『野趣』で読売文学賞（昭和四三（一九六八）

『俳人仲間』で日本文学大賞（昭和四十九（一九七四））。作品は「瀧井文学」と評され、トツトツとした中にも独特の味わいを持つ。昭和十年（一九三五）の芥川賞創設から五十六年（一九八一）まで選考委員を務めた。俳句を生涯の友とし『瀧井孝作全句集』などがある。高山の観光ポスターに用いる「飛騨高山」の文字等六朝風の書法でも知られる。

日本芸術院会員（昭和三十四（一九五九））。高山市名誉市民（昭和四十六（一九七二））。文化功勞者（昭和四十九（一九七四））。勲二等瑞宝章（昭和五十（一九七五））。八王子市名誉市民（昭和五十）。

【飛騨人物事典】

(ウ) 茶流 句碑

一廻り

まはりてもとの

桜かな

茶流



「つくつくと

見ておればちる

さくらかな

七十翁 朱樹

以前、三重の塔と大銀杏の間に、一本の桜の老木が有り、植物分類学者の牧野富太郎が「樹種はエドヒガンであり、もしかして、この桜は大銀杏よりも樹令が古いかも知れない」と言わしめたほどの桜樹。井上士朗のこの句碑は、その桜の木の傍らに建てられていたが、二・三十年前の台風で折れて枯死した後、碑は現在地に移された。



裏面

文化十二年乙亥十二月建立

皐月会之碑

水音社

【水音社】

すいおんしゃ

第十二代飛騨代官（後郡代）大原彦四郎紹正は、俳諧を好んで清流亭楚諾と号し明和三年（一七六六）同志と共に俳壇水音社を高山に起し、第一世の宗匠となった。同七年（一七七〇）俳集「鳥の跡」一卷を刊行した。

安永騒動以後水音社は一時振るわなかったが、近藤一左・平瀬東有・小野柳永・代情順教等によって幕末頃迄続き、明治時代絶えたが、上木雨台に依って再興された。【高山市史】

【井上士朗】

いのうえしろう

寛保二年（一七四二）～文化九年五月十六日

江戸後期の名古屋の俳人で、別号を枇杷園、朱樹と号した。高山、益田方面に弟子が多く、指導の為たびたび飛騨を訪れ長く逗留した。

(才) 森江鷗 句碑

佛とは
涼しき風の
おこりかな
江鷗



北面

可參居士歸寂

享保十六、亥七月十九日

東面

可參居士墓碑銘

南面

森、

拜立

男 純庸

居士名考政號江鶴法諱日可參少壯孳產業匪懈
年四十有二到平湯村見瀑布始作俳歌師濃州連
二坊吟咏不休著位山集二卷為鄉黨見佳蓋高山
俳歌者流之宗匠也七十九而卒 銘 日

偉哉居士 少壯賣茶

衣食既足 別作一家

、瀑之咏 鄉人見嘉

風流好事 樂只生涯

鄉人 赤田義誌

もりこうげき

【森江鷯】

承応二年（一六五三）～享保十六年（一七三二）七月十九日

森江鷯は古川町（飛騨市）生れ、幼名を与三郎、名は孝政、号を可参隠子。高山の森八郎兵衛に養われ通称を彦兵衛、号を賀弾と改め一家を立てて大坂屋治助と称し、後に小森姓を名乗る。宝永五年（一七〇八）飛騨で最初の句集『久羅井山』を出版し、俳句結社「雲橋庵」を創立しその宗匠となる。

【久羅井山】

くらいやま

「久羅井山」は森江鷯の著書で宝永五年（一七〇八）十月出版、江鷯五十六歳の時である。飛騨に於ける俳書刊行の嚆矢とする。尾張名古屋住の露川（月空庵）の序文が見える。美濃派の各務支考門と伝えられているが明確ではない。

【高山市史】

【澤露川】

寛文元年（一六六二）生

『久羅井山』の序文を書いた澤露川は、伊賀上野在の生れ、後に名古屋の渡辺家の養子となり、藤屋市郎右衛門と称した。

季吟系の俳諧に親しみ、号を月空庵または月空居士と言った。貞享元年（一六八四）、芭蕉が『野ざらし紀行』の途次名古屋に立ち寄った時に、芭蕉に入門した名古屋の多くの俳人に対抗する様に『花虚木（はなうつぎ）』を出したが、元禄四年（一六九二）芭蕉が東武に帰る道すがら、宮の宿の梅人亭で入門した。芭蕉最晩年の門人とされる。各務支考の「露川を責む」の口上は俳諧史の中で特筆すべき論争が有り、支考門とあるのは誤り。

(力) 北川可慎 碑

北川可慎居士墓碑銘

高山

赤田暢書

・
・
隸題



西面

碑銘に続き

居士諱朋安高山人本平塚氏出嗣北川氏爲
書塾師少尚奇節喜刀劍習挽大小弓又學易
善射覆爲人口辨遜言恭色善興人交其未爲
北川氏嗣時父道味從瀧甚介受書學甚介故
郡上侯金森氏書史也居士本不事書・稠人
廣坐中被人・辱折節學書然學無常師殆有
書肚之勞故居士善書・少年遊蕩去國宦・
于江

戶方 猷廟時若州刺史神尾君用事居士事之為侍堅君以節儉苛察為治故下吏奴隸之屬以罪黜退者前後無數唯居士謹慎夙夜匪懈靡有過失居數年鄉里請其父使召之歸出嗣北川氏乃以外姓之男使嗣平家氏女以女弟然居士久，宦他邦既，鄉里不事家人生產作業鄉人呂竹，為塾師時年四十有一人，相居士曰子官相也胡為逃隱乎此也答曰余宦，不遂窮，鄉里相者日其然乎官相，為書塾師不失為衆人之長，夢有異人來示以除，穰災之符居士掃几，寫忽雲霧，，起于几上咫尺晦冥從掃，生暗若有妨，寫字者居士強直弗屈

遂得終寫覺後記之秘不示人以為終身之護後又夢有端麗
女子來授以大親至地四字居士拜受敬問其所，來日我自
村山來也言終忽然不見，且按之村山有菅相廟 本邦塾
師祀菅公為先師，是始悟是菅公侍兒來授者也居士開塾
四十年矣從學者前後殆九百人高山人士二世，其門者居
多居士享年八十有一病終于家實寬政十一年己未六月八
日也法，日祐心居士配北川氏產二男三女長轉經學醫，
野口養安号養元為塾師女適長瀬氏已沒一男二女早夭轉
經娶木村氏舉三男六女長名直臣，，京師受業奧道逸為
產科醫賀川氏之

，也號養說一女適杉崎氏次女適杉崎氏已沒二男三女早
夭居士卒之日葬于照蓮寺中近門人等欲投貲，力建之碑
直臣來謁余乞墓碑銘鄉人赤田義為之 銘曰
筆硯閑塾 鄉里之師 居靜而壽 子孫，醫

，乎居士 仁者興久 其視斯碑

維，文化十一年歲在甲戌秋八月

不肖孤轉經

拜立

不肖孫直臣

石工小林久五郎，

きたがわかしん

【北川可慎】

生年不祥、寛政十一年（二七九九）六月八日

書家。高山の人。名は明安。本姓は平塚で北川家を継ぐ。子供のころ剣術、射術を好んだが、書道のこととで辱められたのがきっかけとなって、梁川星巖に書を学ぶ。江戸に遊ぶこと多年、帰郷して書塾を開き塾生は千余人もあった。國分寺に碑がある。享年八一。

【飛驒人物事典】

こばやしきゆうごろう

【小林久五郎】

生年・没年不明

石工。嘉永二年（二八四九）に「宗猷寺蓮花葉大石盤」、文化十一年（二八二四）「北川可慎墓碑」を手掛ける。

【高山市史】

藻にすたく^だ
白魚やとらは^ば
消えぬへし^べ
桃青

延宝九年（一六八二）この句は芭蕉翁三八歳の作で、句碑は芭蕉五十回忌に際し、西田遊魚（蓑笠庵）通称、日下部平兵衛、半助（雲橋庵二世宗匠）が中心となり寛保二年（一七四二）に大垣の沙門堯暁より譲り受けた芭蕉の真蹟短冊を元に建てられ、先例にならない、短冊塚と呼んだ。



北面

遊魚

諱誌

南面

芭蕉翁歸寂元禄七甲戌十月十二日

まっおぼしろう

【松尾芭蕉（桃青）】

正保元年（一六四四）～元禄七年十月十二日

俳人。伊賀上野生。幼名金作又は宗房。号ははやお、別号桃青、泊船堂風羅坊など、藤堂良忠（蟬吟）の近習となり、俳諧に志す。北村季吟に師事したのち、江戸に下り当時隆盛であった談林の俳風を超えた高い文芸性を備えた俳諧に発展させ、蕉風を創始、各地を旅して、多くの句と、紀行文を残した。

代表作に『野ざらし紀行』『俳諧七部集』『奥の細道』などがあり、元禄七年（一六九四）五十一歳、大阪南御堂前花屋の貸座敷で亡くなる。病中吟「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」

にしだゆうぎよ

【西田遊魚】

生年不詳～寛延二年（一七四九）五月二十日

俳人。高山の人。号は蓑笠庵（さりゅうあん）。通称を半助。雲橋庵の初代宗匠・森江鶴の門に入り二世宗匠。寛保二年（一七四二）大垣に遊び沙門堯暁秘蔵の芭蕉直筆の短冊「藻にすたく白魚やとらは消ぬへし」を譲り受け、同志と図って國分寺境内に短冊塚を建てる。

【飛騨人物事典】

(ク) 田島春園 歌碑

海辺松

おすくに
食國の千代のまもりと潮風に

おい
きはひてたてり

いそのまつはらば

春園

この歌は、田島春園が大正七年（一九一八）宮中歌会始めの勅題「海辺松」の詠進歌で、予選に入賞した。



裏 面

向陽居田島春園翁は嘉永二年八月高山に生る父和平母
富子共に富田礼彦に咏歌を學びしにより翁も幼より礼
彦に就き初漢學詩作を習得し後專皇典歌道を修む中年
官公吏教員神職に歷任し晚年縣社飛驒總社郷社荏名神
社及招魂社等に奉仕す大正七年一月宮廷御歌會の勅
題海邊松を咏進し預選の光榮を拜荷せり齡古希を過ぐ
るも尚健全視力衰へず居常讀書に耽り世に貢獻する業
多し著す・鄙田居咏艸飛山語草荏野集拾遺新類景集祝
詞小解雅言・解等あり大正十四年九月一七日歿す享年
七十七なりき 富田豐彦謹撰 立田萬年謹刻

たじまはるその

【田島春園】

嘉永二年（一八四九）八月～大正十四年（一九二五）九月十七日

歌人。本名を田島壮二郎と呼び、山崎弘泰に国学を、赤田章斎に漢学を、和歌を富田礼彦に学んだ。飛騨総社の神職を務め『大野郡史』の編纂に当った。

とみたいやひこ

【富田礼彦】

文化八年（一八二一）二月二十九日～明治十（一八七七）五月三日

国学者・高山県判事。高山の人。初名は定礼。通称は稲太。号を和郷・節斎・白檮園・南東与可楼。高山の地役人で頭取に進む。小野・飛騨郡代に薦めて飛騨各地に非常食糧を蓄えさせ、安政大地震で効果を見せる。明治一年（一八六八）に高山県判事となったが、梅村騒動が起こり、その責任を取って割腹したものの一命を取りとめる。田中大秀に国学を、赤田章斎に漢学を学ぶ。高山陣屋玄関の「天朝御用所」の看板は礼彦の筆。『斐太後風土記』編纂主任。著書『運材図会』『三郡沿革』など多数。

【飛騨人物事典】

やまさきひろやす

【山崎弘泰】

生年不詳～文久二年（一八六二）一月二日

高山の地役人・国学者。幼名は君泰。通称は十郎右衛門。号を蛭園・花里翁・鯉斎。田中大秀に学び国典を修め歌文に長ずる。高山の地役人で天保十三年（一八四二）頭取に進む。弘化四年（一八四七）二月に田中大秀の文机を継ぎ荏門の学頭となる。後に花里村天満宮境内に花里文庫を設け、大秀の遺稿と蔵書を移して保管。著書に『蛭園集』『高原日記』『山分衣』『蛭園雑考』等。享年六六歳

【飛騨人物事典】

あかだしょうさい

【赤田章斎】

天明四年（一七八四）～弘化二年（一八四五）九月二九日

儒学者。赤田臥牛の嫡子。名は光暢。字は永和。通称を新助。幼名は貞吉。鉅埜逸民・公茂と号する。

臥牛の教えを受け、文政一年（二八二八）年から父に代わって静修館の教授。天保三年（二八三二）十一月の大火で静修館が焼失したため高山馬場通り海老坂上に再興し、飛驒国中教授所として郷村を巡回教授。弘化一年（二八四四）九月には神明町角に移築。詩文、絵画にも優れ敬神の念が篤かった。花里天満宮に本人の識した退筆塚がある。 【飛驒人物事典】

たつたまんねん

【立田万年】

明治二年（二八六八）十二月十八日～昭和十五年（一九四〇）五月十二日

石工の名人・神職。河合村（飛驒市）角川生れ。旧姓は湯畑。号は湯万年。初名を梅之助。重義とも名乗る。坂上村の立田家を継ぐ。一二歳で上京して彫刻師の岡田広次に入門し、石材彫刻の皆伝を受け帰郷。養老公園碑、七卿西竄記念碑、和宮和歌碑は三大傑作とされる。手掛けたものは八十を超え、飛驒においては皇威輝八鉞岩碑、田島春園歌碑など六十に近い。

【飛驒人物事典】

三、参考文献

『飛驒の文学碑遍歴』

中舎高郎 著 教育出版文化協会

なかやたかお

【中舎高郎】

大正九年（一九二〇）三月九日生、平成十八年（二〇〇八）八月三十一日

学校長。高山町三町出身。ペンネームは山中隆男岐阜師範学校卒。昭和四十一年（一九六六）岩滝小中学校、四十五年（一九七〇）大八中学校、四十七年（一九七二）高山北小学校、五十一年（一九七六）～五十六年（一九八一）松倉中学校の各校長を歴任。著書『教育ほろよい話』『孫に語る飛驒の歴史』『飛驒の文学碑遍歴』ほか。岐阜県僻地教育功労表彰（昭和四十四（一九六九））。岐阜県学校保健功労表彰（昭和五十二（一九七七））。

【飛驒人物事典】

『飛驒人物事典』

高山市民時報社

『高山市史』

高山市

高山市近代文学館調査・研究報告書

平成二十二年三月発行

編集 社団法人高山市文化協会